

老年期の女性性に関する心理臨床的論考

(論文要旨)

西尾 ゆう子

平成 28 年度

現代日本は世界に類稀な超高齢社会を達成した。高齢者人口の増加に伴い、高齢者の心のケアの実践・研究は現代の心理臨床学において重要な課題の一つである。中年期よりさらに個人の多様性が大きくなる老年期では、性差や人格特性に応じた実践・研究が必要である。しかし、老年期の多様性を考慮した学術研究は限定的であり、現状では本領域の研究は十分とはいえない。現代社会の女性は男性より平均寿命が長く、長期化する老年期を一人で歩む可能性が高い。高齢者臨床の現場でも、女性の方が男性より圧倒的に多数を占めることから、高齢者の問題は、女性がいかに年を重ねるかという問題に深く関わっている。そのため、老年期を生きる女性を対象とした心理臨床的論考は意義深い。上述した現実認識的要請から本論文では、老年期女性を対象として、老年期を生きる主体としての感覚に迫り解明することを目的とした探求を試みる。それに際しては精神分析理論に基づき、「女性性 femininity」という概念を用いてその心理的特徴を考察する。

「女性性」は、心理臨床学が対象としてきた重要なテーマの一つである。女性という性に生まれた個人が、女性という性を受容し、その価値を見出して主体的に生きるプロセスには特有の困難がある。個人の「女性性」の形成過程では、母親に依存すること、母親に依存しつつも父親の愛情を巡って母親と競争的關係になること、母親との競争的關係を超えて母親と連帯することという、母子関係を巡る葛藤を意識的無意識的に体験することが要請される。さらに女性の身体は、異性の侵入を受け容れ、新しい命を育むために変化するが、その変化を自己のものとして受容することは少女にとって易しいことではない。

臨床現場に視点を置くと、心理療法場面では、女性性に関わる困難を通して個人の核心的な心理的問題が表されることは少なくない。それらは、女性であることの価値を十分に見出せず、女性としての身体を受け容れられないことや、女性としての社会的役割を担うことに対する抵抗、そして男性と関係を築くことに関わる葛藤といった形で表される。すなわち、「身体」「社会的役割」「性愛」の3つの側面から、女性性に関わる困難は表出される。では、すでに女性として年月を重ねた老年期女性では、女性性を巡る葛藤は見られないのだろうか。否、女性性を巡る問題が老年期に現前化する可能性は十分にあると考えられる。老年期には、老年期特有の心理的課題があることに加え、それまでの発達段階で未解決であった問題が再燃することも多いからである。しかしながら、これまで老年期女性が体験する心身の変化は、加齢による生物学的現象として限定

されて捉えられてきた。そのため、老年期女性の心理的体験に焦点を当てた論考は非常に限られている。本論文は、従来注目されることの少ない老年期女性の心身の変化を女性性の発達変容に関わる現象として捉え直し、検討するものである。たとえば、老年期女性は、閉経以後の身体機能や容姿の変化をどのように受けとめているのか。また、中年期までに女性は多様な社会的役割を担っているが、役割の終了・変化に適応する過程でいかなる心理的体験をしているのか。さらに、身体的・社会的側面の変化は、異性との関係性、ひいては女性としての自己の捉え方にどのように影響するのか。以上のような問いを包含しつつ、老年期の女性性に対する理解を深めることは、老年期女性や老年期女性とともに生きる人への心理的援助に寄与するに違いない。

本論文では次のような構成で論を進めたい。まず、第Ⅰ部「研究の基礎」第1章では、本論文の基本的視点と枠組みを示す。第2章では、精神分析の創成者Freud, S., 対象関係論を構築したKlein, M., そしてライフサイクル論を提唱したErikson, E. H. の晩年を参照しながら、老年期について論じる。次に、老年期研究の歴史を概観し、心理臨床学とその近接領域において老年期がどのように捉えられてきたのかを把握する。さらに、21世紀の老年期研究の動向について述べる。超高齢社会である現代では、老年期を捉える見方も、また、老年期研究の方法も多様化しつつあることを示す。第3章では、女性性について論じる。女性性という視点から女性の心を捉える視点について、Freud, S. を始めとするこれまでの知見を整理する。乳幼児期の心の発達を重視する精神分析の視点だけではなく、生涯発達やフェミニズムの視点も加えて多角的に論じる。さらに、現代の精神分析的な女性性論に言及する。

第Ⅱ部「研究の展開」では、第Ⅰ部で紹介した理論的背景を踏まえて「老年期女性の心的世界の探究」と題し、質的研究の実際について論じる。第4章では、本論文で用いる質的研究の方法論、すなわち、半構造化面接法と投映法の特徴と本研究における意義を述べる。第5章「老年期女性の心的世界の探求」1節で論じる第一研究は、老年期女性の自己認識に関する理解の深化を目的とする質的研究である。半構造化面接の結果、①日常の中で感じられる身体内外の変化・不全が各人の身体イメージに働きかけ、それによって加齢の現実が意識されること、②内的に感じられる自己感や外界に向かう好奇心は若々しい感覚が保たれており、多くの女性が実年齢よりも「若く見られたい」傾向があるため、暦年齢と自己の感覚にギャップが見られること、③中年期と老年期の移行期にいるように感じている女性が多く、老年期への移行は緩やかに進むプロセスである

こと、④老年期への移行期には「現役の自分」であることを失うことを悼む喪の哀悼の仕事が見られること、の4点が示されている。そして、たとえ視覚的には年を重ねているように見えても、女性個人の主体としての老いの感覚は多様であり、各人の心のあり様に寄り添う態度が重要であることが主張されている。

第5章2節で論じる第二研究は、前節で得られた結果をもとに、女性が老年期を生きる過程において生じる心理的变化について「個」と「関係性」の2側面から理解を深めることを目的とした質的研究である。まず、老年期女性の語りを聴くことによってどのような心理的テーマを「個」として生きているのか、そしてどのような「関係性」の中で誰と老いを共有しているのかについて理解し、各自の体験を貫く普遍的特徴のモデル化を試みる。また、その現象が個人においてどのように体験されているのかを個別事例を通して検討する。「個」の側面では、老年期を通して徐々に進行する身体・認知の衰えに対する【衰えへの適応過程】、家族内での自己の位置付けが変化したことに伴う【新たな自己の獲得へ】、そして死の現前化による『自分の死を思う』体験を経て＜存在の次元での変容＞、すなわち【Being / Becoming】が整理された。次に「関係性」の側面では、大切な他者の死を悼む【喪の哀悼の仕事】、他者をケアする役割を担っていた女性が【ケアする側からケアされる側へ】なること、そして死の現前化による『自分の死を思う』体験を経て、＜存在の次元での変容＞、すなわち【Being / Becoming】が整理された。さらに、コア・カテゴリ『自分の死を思う』体験について事例をもとに検討を重ねた結果、個人が死をいかに捉えるかは、母親あるいは母親的養育者のコンテイング機能を個人がいかに内在化しているかを反映していることが示唆されている。

第6章1節では、前節までの研究において多くの女性が身体の変化や不全によって老いの現実を認識する傾向がみられたことを踏まえて「身体と老い」をテーマにした第三研究について論じる。そこでは、身体次元で女性らしい特質を失うことにまつわる内的体験の理解を試みた。考察では「みる」という動詞をキーワードに、老いゆく自分の身体をどう「みる」か、また、どのように人に「みられたい」と望むかについて検討している。

半構造化面接では、老年期女性が「女性らしい身体の変化」として印象に残っているものとして、中年期の体験である閉経が多く挙げられた。閉経の捉え方は多様で、肯定的に体験する人もいれば、女性性の喪失と感じる人もいた。この事実から、女性にとっ

閉経はインパクトのある現象であり、そのインパクトは年単位に及ぶことが示唆される。他方、閉経は、初潮や妊娠のように目に見える現象ではない。それゆえ、女性が閉経を受容する過程においては、その変化をいかに「みる」か、すなわち「喪失」に対する心の処し方が反映されることや、どのような対象と同一化して「老い」や「自己」を捉えているのかが重要であることが示され、そこでは、父親よりも母親の与える影響が大きいことが見出された。さらに、閉経以後に体験されたその他の身体変化についても、自己の連続性が揺るがされる深い心理的变化を含む体験であることや、子宮や性器に関わる生殖器疾患においては女性性の傷つきが体験されることが理解された。

性愛の側面では、老年期女性が男性を感知する時、女性は自らのセクシュアリティをいきいきと体感することが明らかになった。とりわけ、胸のふくらみは、女性的な外見の魅力として、また、子どもを産み育む母性を象徴するものとして、男女・年齢を超えて様々なファンタジーを喚起することがうかがえた。個別事例の検討から、男性から女性として「見られる」ことを強く意識している女性にとり、性愛的な魅力の劣化は自尊心の低下を直接的に招くことが推測された。それゆえ、加齢による身体変化という現実から情緒的に距離を置き、現在の自分を若い頃の自分と同一視することで、自尊心の低下からの防衛を図る認知的対処が作動していることが示唆された。

続く第6章2節では、第四研究「ロールシャッハ法を通して理解するジェンダーイメージ」について論じる。本節では、ロールシャッハ法の導入により、個人のパーソナリティとそのジェンダーイメージを力動的に理解することが目指された。その結果、無意識的次元で体験されているジェンダーイメージは、性愛的感情を含めた個人のパーソナリティを如実に反映し、顕著に個別的であった。また、ジェンダーイメージは、女性らしい身体の特質を失うことや、死の現前化といった老年期に特異な喪失を抱える女性のこころを理解する際に有用な情報源となることが解明された。そして、長い生育史を背景とする老年期女性が周囲との関わりの中で発達変容を遂げてきた側面と、個人の本質に関わる不変的側面を臨床的に汲み取ることができるという点で、ロールシャッハ法は意義深く稀有な手法であることが示された。

第7章1節では、TAT（主題統覚検査；Thematic Apperception Test）を用いた第五研究について論じる。TAT反応の形式面における老年期女性の特徴として、情緒的刺激や葛藤に対する防衛のあり方が高度ではないことや、意識的無意識的な不安にさらされ

やすいことが推測された。また、心的態度が過去に向いており、老いに伴う新しい体験を受け入れることの困難さが示唆された。対人関係においては、情緒を介した共感的なつながりが志向されやすいが、主観に偏る傾向が理解された。調査場面という特殊性や世代の特質もあってか、深刻な孤独感や被害感が直接表されることは少ない一方で、それらの感情はTAT図版の12BG(自然の情景)に託されてうかがい知ることができた。そこで、自らの内面を語ることを促す「とぼ口」としてTATを位置づけ、心理的援助を必要としている人の発見や、精神的不調を予防するための早期関わりに活用することを提案した。

続く第7章2節では、第六研究「回想法を通じた女性の生」について述べる。個人回想法の事例検討から、ある女性の女性性の変遷を微視的に描き出すことを目的とした。また、Erikson, E. H. が老年期の発達課題とした「Integrity」という概念について、女性性という視点から考察を試みた。女性性の発達変容に重要な意味を持つ母親あるいは母親的養育者や、異性との関係性は、たとえその対象がすでにこの世を去っているとしても心理的次元で進展することや、関係性から疎外されるのではなく、関係性によって生かされ、さらに死後も関係性の中に生き続ける自分を発見することが、女性の「Integrity」の特性として重要であることが見出された。

第Ⅲ部総合考察では、本研究の総括と展望を述べる。本研究の結果、女性にとって、一般に喪失・衰退の時期と言われる老年期は、「みにくい」ことが「みえる」ようになり、自らの不完全な生き様や、死に向かい衰えていく身体を受け容れる心理的「器」が生成される過程と捉えることができる。さらに、個人の女性性形成に影響を与えた重要な他者との関係性も、老年期には、心理的次元でその本質的意味を捉えることが可能になる。性愛についても同様に、肉体を介して交わる関係から、心理的次元において交流する関係へと変化する。したがって、老年期の女性性の特徴とは、生老病死を生きる人間の存在を精神において包含する機能といえる。

老年期女性は、女性同士の連帯の元に異性を愛する能力が成長する青年期や、他者を受容し世話する能力が発達する成人期に身につけた性質も兼ね備えており、より豊かな女性性を有している。これを筆者は年輪にたとえ、表面的には年齢を重ね「枯れた」ようにしか見えないとしても、心理的には幼い少女のように、また青年期の女性のように、年をとらない部分があることを表した。そこには、女性として「みにくい」自分を「み

ないようにする」心の動きや、女性性の形成過程で体験した心の痛みを反芻したり、反復したりすること、さらに性の主体としての欲求も同時に存在しているのであった。他に、本論文の研究対象者が属する世代の特徴として、思春期・青年期に敗戦を経験し、家族・友人・故郷を喪失した体験が共通して語られた。中には喪の哀悼の仕事が老年期まで持ち越されている事例も見出された。これらはいずれも個人の女性性の形成に影響を与えていると思われた。これより、老年期女性を対象とした心理臨床実践の重要性を主張した。

本論文で得られた成果は、女性性という概念に新しい意義を付与するものであり、さらなる女性性研究の深化や老年期女性の心理的援助の可能性を拓く確かな基盤を提供することが予期される。

(以上)